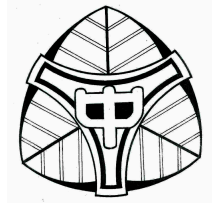


相模原市立上溝南中学校

令和8年度4・5月号
5月8日発行



上南中だより

「教育」から「学び」へ ～3年目のチャレンジ～

校長 松尾 英和

令和8年度がスタートして、もうすぐ1ヶ月が過ぎようとしています。校庭の緑が日ごとに濃くなる中、生徒たちが新しいクラス、新しい仲間とともに、自分なりの歩みを始めている姿を見ることは、私にとって何よりの喜びです。

今年度のスタートにあたり、生徒の皆さんに、昨年度から繰り返し伝えてきた

「自分らしく生きること」「個性を尊重すること」「誰もが安心して過ごす学校を作ること」

に加え、

「勉強の楽しさを知ること」「自分も他人も大事にすること」

をお願いしました。

また、保護者の皆様には、これまでの

「集団の秩序を維持するための教育」

から、

「多様性を尊重し、個性を伸ばす教育」

へと、舵を切る決意をお伝えしました。

この方針をとろうと思ったきっかけとなった、エピソードを紹介させていただきます。

◆脳天を貫いた「ある問いかけ」

今から7年ほど前、神奈川県内では不登校の生徒数が1万3千人（現在は2万5千人を超え）へと急増し、いじめや暴力行為も大きな課題となっていました。当時、その対応をする担当だった私たちの部署は、手を変え品を変え対策を練りましたが、その数は増えていくばかりでした。そんな状況を打開するために、学校関係者だけでなく、新聞社、テレビ局、銀行、商工会議所、NPO、フリースクール、大学教授など、多様な立場の方々30名ほどに集まっていただき、議論する会のメイン担当となりました。

上司や仲間と何日も悩み、議論の柱となるテーマを考えました。最終的にたどり着いた答えは、

「教育って何？ 学校って何？」というものでした。

一度、まっさらに、教育の「根っこ」から考え直せば何かが見えてくるのではないかと、そう思って考案した、自信作でした。

当日、進行役を務めた私は、最初の発言を、信頼していたあるフリースクールの代表者にお願ひしました。「どんな素晴らしい意見が聞けるだろう」と期待していた私に、その方は静かに、しかし重みのある言葉を投げかけました。

「このテーマは、担当の方が、きっと何日も悩んで考えたものだと思います。そしてこのテーマにかける、深い思いも伝わってきます。しかし、このテーマで話し合っているうちは、きっと何も変わらないと思います。」

予想もしなかった否定の発言に、私は動揺しました。「どういふことでしょうか」と問い返すと、その方はこう続けました。

「どうして『教育』なのでしょう？」

「子どもを中心に考えるなら、『学び』って何？ ではないのでしょうか？」

「私たちはみんな大人の立場から『教育』を論じています。子どもを中心に考えていない。それを根本から改めない限り、いじめも不登校も減ることはないと思います。」

その瞬間、脳天から稲妻が落ちたような衝撃を受けました。

「教育」とは「教え、育てる」という大人の能動的な営みです。それは常に「大人の側から子どもを正しい方向に導く」という視点に縛られていたことに気づかされたのです。子どもの目線から「学び」や「学校」を見つめる視点、私には欠落していました。

◆「寄り添う」に隠れた思い上がり

その後の話し合いは、これまでの常識を覆すものとなりました。

私が「生徒の気持ちに寄り添うことが大事ということですよ」と発言した際も、他の参加者から厳しい意見をいただきました。

「学校の先生はよく『寄り添う』と言うが、それがどれほど上から目線で、『してあげる』という思い上がった言葉であるか、分かっていないのではないかと」

その言葉を聞いたとき、かつて後輩の先生が私に語ってくれた言葉を思い出しました。

「教師にとって大切なことは、子どもに敬意を払うことだと思っています」

この瞬間、その2つのピースがつながりました。

子どもも、保護者も、教師も、みんなそれぞれに人格を持った一人の人間です。

教師が上から指導するのではなく、互いを一個の人格として尊重し、対等な立場で関わる。

相手の気持ちを完全に理解することはできなくても、「今、この子はどんな気持ちなのだろうか」と想像し続ける。

その姿勢こそが、今の学校に最も必要なことだと気づかされました。

◆「逆転のベクトル」で進める学校運営

これまでの学校教育は、「**集団の秩序を維持する中で、個性を尊重する**」

というものでした。しかし、そのベクトルを逆転させ、

「**個性を最大限尊重する中で、集団の秩序を保つ**」

という方針で進めていこうと考えています。

本校に着任して3年目。1年目に、その考え方を少しずつ取り入れ、2年目の昨年は、この2つの理念を並行して進めてきました。そして今年度は、これまでの考え方と正反対の、逆転のベクトルで学校運営を行うチャレンジを始めます。

とはいえ学校は、「生徒40人に対して1人の教員で教育する」という枠で動いており、教員が、一人ひとりの生徒にそれぞれ対応することは、現実的には不可能です。この方針で進めるということは、教員にこれまで以上の負荷がかかります。これを働き方改革と両立して進めていかななくてはなりません。

そのためには、

◇多様な「**学びの場**」や「**学びのスタイル**」を用意し、生徒の**意思を尊重し、自己決定・選択の機会**を多くする

◇生徒(保護者)と**対話の機会**を増やし、その**声に耳を傾け**、できるだけ対応できるように、**組織・運用を柔軟化**する

◇これまでの「**学校(学年)全体**」での取り組みや行事を**縮小**していく

◇学校の**個別対応には限界がある**ことを生徒・保護者に理解していただく

などが重要だと考えています。

◆本校の具体的な取り組み

この理念を形にするため、今年度は具体的に、特に以下の取り組みに注力します。

1. 「やろう!」と思える授業づくり

相模原市教育委員会の授業改善研究推進校として「**すべての生徒が『やろう』と思える授業づくり**」を研究テーマに掲げ、「**指導**」から「**学び**」への転換を図ります。

2. 支援としての生徒指導

生徒一人ひとりの状況に応じて、生徒の相談にのり、助言をし、**生徒が自分で自分らしく生きていける**よう応援し、支援するスタンスを徹底します。一律な支援・指導ではなく、全員をそれぞれ特別な存在として認識し、個に応じた支援・指導をしていきます。

3. 多様な居場所の創設

昨年度の「**陽だまりルーム**」に加え、新たに「**学習支援ルーム**」と「**スキルアップルーム**」を開設しました。一つの教室、一つの学び方に合わせるのではなく、生徒が自分に合った環境を選べるようにします。

◆社会から求められるこれからの教育

国の学習指導要領には、次のように書いてあります。

「これからの学校には(中略)一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き…」

また、相模原市も次のように「温かさと先進性のある教育」という理念を掲げています。

「一人ひとりの個性を認めて大切にするとともに、障害の有無や生育環境などにかかわらず誰もが十分に学ぶことができるよう、誰一人取り残さない温かさのある教育と、未来社会を見据え、既成概念や前例にとらわれずに進取の精神で臨む先進性のある教育を推進します。」

上溝南中学校が目指す「教育」は、単なる理想でも、本校の独自の思いつきでもなく、これからの学校のあるべき姿なのではないかと考えています。困難なチャレンジですが、生徒・保護者・教職員が共通の方向を目指し、互いに手を取り合って実現していきたいと考えています。

別添の「R8上溝南中学校の教育(グランドデザイン)」には、私たちの目指す姿を図解しています。ぜひ一度、目を通していただければ幸いです。一年間、どうぞよろしくお願いいたします。